

# 『好色閻魔歌舞記』 追考

杉本和寛

本誌第38集に「零本『好色閻魔歌舞記』小考」として紹介した『好色閻魔歌舞記』は、西鶴以降の代表的な浮世草子作者である西沢一風の新出作品であった。その際には、巻一の零本のみを手がかりに、(1)従来『役者小夜衣』巻中・下として知られていた作品の原題名が『好色閻魔歌舞記』であり、序記から作者が西沢一風であったこと。

(2)これも序記から、刊行が宝永六年「一七〇九」の春頃ではないかということ。

(3)横本としての体裁や挿絵の画風から、この頃西沢一風作品の出板を手がけていた、京都の菊屋七郎兵衛がその板元ではないかということ。

などを確定、あるいは推定した。

近時、この『好色閻魔歌舞記』の巻二・三・六が出現したことで、

前稿に新たな情報を加えるとともに、前稿および『浮世草子大事典』の項目解説について、修正の必要が生じてきた。<sup>(1)</sup>そこで以下において、新出資料による情報の付加や修正をおこない、『好色閻魔歌舞記』について二、三の指摘を加えるとともに、その出板事情について推論を示すこととする。

## 一 『役者小夜衣』について

前稿でも触れたことであるが、考察の前提として『役者小夜(狭夜)衣』なる書物について、まずは説明をおこなっておく。<sup>(2)</sup>

該書はケンブリッジ大学アストン文庫に所蔵される三卷三冊(ただし中・下巻を合綴し、現装は上巻一冊、中下巻一冊の二冊本となっている)の浮世草子である。外題は後補書題簽により、「江戸/京

／大坂 役者狭夜衣 上」「江戸／京／大坂 役者狭夜衣 中／下／尾」となっている。ただし、現存の上巻は西沢一風作『風流三國志』（宝永五年正月刊、菊屋七郎兵衛板）の初・二巻を合わせ、目録内・尾題を削り、初巻の第三図以外の挿絵を全て除いた佚題浮世草子で、中・下巻とは全く異なる内容である。いずれかの段階の所蔵者が、異なる二つの作品を取り合わせて一つの作品に見せかけ、全体の書名を中巻目録題により『役者狭夜衣』として統一し、外題を付したものと思われる。「江戸／京／大坂」という角書や、三巻三冊という体裁を装ったことは、当時の役者評判記を意識したものであるろう。

本稿にかかわってくるのは中・下巻で、「役者狭夜衣」（中巻目録題）、「役者小夜衣」（中巻内題・下巻目録題・下巻内題）という書名をもつ。板心の巻付が中巻（巻三・巻四）、下巻（巻五・巻六）となっていることから、もともと六巻六冊の浮世草子作品であり、目録題や内題が入木によるものと思われることから、「役者小夜衣」は改題後のものであるとされてきた。

下巻末尾には刊記が残っており、

享保二年丁酉正月吉日

〈五行程度間隔あり〉

大坂高麗橋西

油屋平右衛門板

とある。油屋平右衛門は、安上平右衛門名義で『和州諸將軍伝』（宝永四年）、『広益塵劫記大成』（宝永六年）を、油屋平右衛門名義で『平家物語』（宝永七年）、『新古今和歌集新鈔』（宝永八年）、『女重宝記大成』（同）などを刊行している<sup>③</sup>。「大坂高麗橋西」「大坂高麗橋筋大豆葉町」などの所付から、同所で元禄以来出版活動をおこなっていた油屋与兵衛と同族であったと考えられ、『和州諸將軍伝』、『広益塵劫記大成』は与兵衛との相板である。この油屋平右衛門については、『好色閻魔歌舞記』の板元について後述するところで再び触れることとする。

いずれにしても、現存の形態も含めて謎の多い作品として捉えられていた『役者小夜衣』であるが、長谷川強氏や井上和人氏の考証から、西沢一風作品であることと菊屋七郎兵衛が板元であることが推測されていた<sup>④</sup>。それを受けて拙稿においては、『好色閻魔歌舞記』巻一零本により、『役者小夜衣』の原題が『好色閻魔歌舞記』であり、その作者が西沢一風であることを確定し、板元については確証はないものの菊屋七郎兵衛であろうと推定したことは前述のとおりである。

## 二 『好色閻魔歌舞記』の内容と先行作品の利用

ここでは、新出資料による問題点を考える前に、『好色閻魔歌舞記』の内容について確認しておく。今回新たに巻二・三・六が出現し

たことで、巻一後半部を除くほぼ全体の内容を知ることができるため、『浮世草子大事典』よりは少々詳しくその梗概をまとめておくこととする。<sup>(五)</sup>

## 巻一

〔二の二〕刊行の前年（宝永五年）に亡くなった江戸の役者中村七三郎の恋人（小はる）は、尼姿となって諸国を行脚し、冥界への入口とされる京都六道の辻にて同じ尼姿の女性と出会う。この女性 は八年前（元禄十四年「二七〇一」）に京で亡くなった二代目嵐三右衛門の妾（さよ）で、二人ともに今一目恋しい七三郎・三右衛門に会うことを閻魔大王の像に願っている。そこに随黄鬼・雷天鬼の二鬼が地獄よりあらわれ、地獄では釈尊二千五百年忌追善のための七日間の大赦があり、中日の二月十五日には中村七三郎・嵐三右衛門を筆頭に亡者となった役者たちによる歌舞伎芝居の興行が行われると告げる。さらに二人の尼に懸想した二鬼は、尼達に言い寄る手段として彼女らを地獄に連れて行く。

〔二の二〕二鬼が尼達在地獄の各所や仕組みを説明しながら連れ回す。また、灑さらの川原にて二月十五日に行なわれる釈尊追善の歌舞伎興行の番組が示される。太夫本は地藏菩薩、座本は閻魔大王が務め、樽屋おせん物、三勝半七物、雁金文七物、曾根崎心中物などの世話物狂言が、亡者となった役者たちを娑婆での役柄に配するなどして仕組まれている。

## 巻二

〔二の二〕大赦の告知が地獄中に行き渡り、地獄の責めから一時的に解き放たれた亡人たちは、さまざまな遊興で憂さを晴らす。灑の川原の芝居小屋には、閻魔大王・皇后をはじめ、葬頭川の姥や娑婆で有名な遊女達、あるいは八百屋お七や大経師おさんなどもつめかける。二人の尼は芝居の果てるのを待ち、中村・嵐両名と再会する。しばしの口舌の後、仲裁に入った随黄・雷天二鬼を酔い潰し、尼達と両役者は久々の逢瀬を楽しむ。

〔二の二〕灑の川原では大赦の期間中、亡者となった遊女達による遊里が開かれている。そこに娑婆では敵役の名優であった大山義右衛門が遊びに行くと、熊坂長範や石川五右衛門など名だたる盗賊の亡者があらわれる。金を持たない盗賊達は義右衛門から財布をすり取ろうとするが見破られ、生前熊坂長範役で名を馳せた義右衛門から長範本人が嘲弄される。別れ際に義右衛門から小金を与えられた長範・五右衛門達は、その金で安店に遊びに行くが、もらった金が贖金であったために、獄屋に連れて行かれる。

〔二の三〕仮設の遊里へ、俱生臣や見る目・嗅ぐ鼻などの佞臣とともに、閻魔大王も遊びにやって来る。生前大坂新町の名妓であった夕霧などと戯れるところへ、忠臣冥官みょうくわんが諫言にあらわれる。言葉を尽す冥官を不快に思う閻魔大王は、その出仕を止め、その後も乱痴気騒ぎを続ける。

## 巻三

〔三の一〕遊女のみならず二人の尼をも口説こうとする閻魔大王は、七日の大赦をさらに十四日延長してまで、なんとか二人をものにしたが、遊君や尼達のために大王の足が遠のいたことを恨んでいる。中村・嵐と随黄・雷天二鬼が尼達を取り戻すために姥の嫉妬心を煽り、丑の刻参りをさせると、姥の首がどこかへ飛び出していく。

〔三の二〕遊女・尼達の誰一人閻魔大王の意のままにならない中、平野屋の岩が皆の身替りで床の相手をする。大王が岩に起請を書こうとすると葬頭川の姥が生霊となつてあらわれ、恨み言とともに遊女達の解放を迫る。その場を取り繕うことで姥の生霊を退けた大王は、翌朝姥の一念が身にこたえ体調を崩す。薬効で体調を取り戻した大王は、反省することもなく遊興の続行を宣言し、葬頭川の姥には閉門を命じる。

〔三の三〕翌日、俱生臣が葬頭川の姥に閉門を申し渡す。一旦快復した閻魔大王だが、再び生死の境をさまよう。そこで、前鬼坊・五鬼坊が呼ばれ、物の怪退散の祈祷をおこなったところ、葬頭川の姥の姿が立ちあらわれ、両坊によって調伏される。ところへ皇后と舎弟初江王しよこうが登場し、遊女や尼達を預り去って行く。

## 巻四

〔四の一〕大赦の後に遊女や尼達が糺明・処刑されると知った嵐・中村らに、葬頭川の姥は閻魔大王・皇后への謀反を提案する。地獄中の役者の亡人達を集め、まずは皇后城を攻め落とし、遊女・尼達

を奪い返し、皇后や初江王を拉致しようという作戦をたてる。

〔四の二〕亡人の役者達（立役・敵役）に、源平の武将をはじめとする役割を申し渡す。源三位頼政（初代嵐三右衛門）、源義経（二代目嵐三右衛門）、弁慶（鈴木平左衛門）、渡辺綱（荒木与次兵衛）、坂田金平（大山義右衛門）、朝比奈三郎義秀（市川団十郎）、佐藤忠信（岩井半四郎）、曾我十郎祐成（中村七三郎）、曾我五郎時致（染川重郎兵衛）、三浦荒次郎（大和屋甚兵衛）などで、主として生前に得意とした配役となっている。

〔四の三〕女形・若衆方・親仁方・道外方・花車方の配役をおこない、めいめい武装する。葬頭川の姥が敵陣の説明をした後、檄を飛ばし、本物の源平の武将達さながらに出陣していく。

## 巻五

〔五の一〕剣の山で遊女・尼達が即日処刑されるとの知らせを随黄鬼・雷天鬼がもたらし、軍勢はそちらに向かう。大山義右衛門の金平が遊女・尼達を救い、鈴木平左衛門の弁慶、市川団十郎の朝比奈、荒木与次兵衛の渡辺綱が鬼達を蹴散らし、初江王を生け捕りにして葬頭川へ帰還する。

〔五の二〕帰還後初江王を獄舎に閉じ込める。そこへ、尼達を取り返したことを聞き、随黄鬼・雷天鬼が約束通り自分たちの思いを遂げさせるよう嵐・中村に迫るが、大和屋甚兵衛の三浦荒次郎、染川重郎兵衛の曾我五郎が追い払う。さらに、全軍を挙げて大王・皇后・十王を攻める陣容を整える。一方、姥・役者達の謀反や初江王の入

牢を聞いた閻魔大王方も、十王や鬼達を糾合し、迎え討つ準備を始める。

〔五の三〕諫言の失敗から蟄居を申し渡された冥官は、通りがかりの下鬼から役者たちの蜂起の様子を聞く。役者軍は熊谷直実・悪七兵衛景清の案により、初江王のみならず懸衣翁・奪衣婆、さらには葬頭川の姥も騙して縄目につけ、軍頭の楯に据える。閻魔大王軍も亡者が原を決戦の場と定め、陣形を整える。

#### 卷六

〔六の二〕大山義右衛門の金平が剛婆者を、染川の曾我五郎・坂東又太郎の近江判官盛俊が鉄鬼束・竜磨剛を、西国兵五郎の土肥実平が雷雲鬼を、荻野沢之丞の巴御前が雷天女をそれぞれ倒すなど、役者軍優勢で三日目の夜を迎える。

〔六の二〕閻魔大王の側近、見る目・嗅ぐ鼻は、大王軍劣勢を見て大王の首を手土産に敵の軍門に降ろうとするが露頭し、処刑される。一方、蟄居の忠臣冥官は大王軍の負けを予見し、極楽に赴いて釈迦・阿弥陀二尊に事態の収集を願い出、二尊は地蔵菩薩を使僧として派遣することを約束する。両軍にらみ合う中、冥官が地蔵菩薩の来迎を告げる。

〔六の三〕地蔵菩薩は大王を教誡し、和睦を勧める。随黄鬼・雷天鬼は閉門を申し付けられ、初江王・姥ら四人は大王方へ引き渡される。尼達は娑婆へ戻され、役者達は極楽へ移される。極楽へ出立の門出に、嵐三右衛門が丹前六方を演じ、他の役者達が演奏をおこな

う。やがて元の六道の辻に戻った尼達は、このいきさつを『好色閻魔歌舞記』として出版することにする。

前稿でもみたように、本書は中村七三郎一周忌を当て込みつつ、その構想は元禄十一年「一六九八」刊『小夜嵐』に大きく拠っており、序文で「古小夜嵐といふ書有を見ずや」と触れた上で、「新小夜嵐」(巻一・巻六目録)・「新佐夜あらし」(巻二・巻三目録)を標榜している。『小夜嵐』は、釈迦入滅後二千五百年忌の涅槃(二月十五日)の前後十五日間に大赦のおこなわれる中、地獄に落ちた源平の武将達が不満を募らせ、閻魔大王や地獄の諸王に反乱を起こし、最後は釈迦・弥陀の仲裁から平穩に戻るというものである。『好色閻魔歌舞記』は、その源平の武将達をかつての名優に演じさせ反乱を起こさせるところに眼目・手柄がある。さらには、大赦の際に遊廓が設けられ、閻魔大王までもが遊女や尼達に耽溺する場面や、『小夜嵐』では目立たない葬頭川の姥を閻魔王の愛人に設定し、その執心ぶりを描くところに「好色本」としての性格を見せている。

『好色閻魔歌舞記』の『小夜嵐』利用は構想にとどまらず、文章の剽窃という形でもおこなわれている。前稿で指摘した巻一の二で閻魔王宮を説明する場面(『小夜嵐』巻一の第二)、同じく巻一の二の釈尊出世の話(同巻一の第二)以外にも、たとえば、巻二の二で大赦で解き放たれた亡人達が様々な遊興で楽しむ場面(同巻三の第十五)、巻二の三で閻魔王が遊廓にて和歌・詩文の知識を披露し自

ら詩作する場面（同巻一の第二）、同じく巻二の三で冥官が閻魔王に諫言する際の摩尼女親子の話（同巻二の第六）、巻三の一葬頭川（の姥）の説明（同巻二の第七）など、細かく利用されており、古典作品や近時の事件を「やつす」という一風得意の手法とはまた異なつた、人気作品利用の意識がうかがえる。『梔久二世物語』や『寛潤鑑引』（正徳三年「二七二三」刊）が正徳五年には『新小夜嵐』と改題して出版され、同じ正徳年間には『続小夜嵐』なる作品も刊行されていることを考えると、いち早く『小夜嵐』物の人気にあやかっているのである。

一方、『好色閻魔歌舞記』では、他にも先行作品の利用に特色が見られる。巻三の三で、葬頭川の姥の閻魔王に対する妄執を祈禱によつて祓おうとする場面、姥の恨み言が延々と続く箇所は、近松門左衛門作『用明天皇職人鑑』（宝永二年十一月、竹本座）第三の「鐘入の段」をほぼそのまま剽窃している。『小夜嵐』同様かなり雑駁な利用であるが、このことは同じ時期に執筆されていたであろう『風流足分船』（宝永七年刊）における『男色十寸鏡』の利用方法と同じ傾向を思わせる。<sup>(六)</sup>『御前義経記』（元禄十三年刊）等の古浄瑠璃利用の方法とは異なつた、この時期の一風の典拠利用の方法については、あらためて考え直す必要があるだろう。

### 三 刊行時期および板元の問題

今回の新資料により巻二の内容が明らかになつたことと共に重要なのは、巻六末尾の刊記およびその前に付された『傾城伽羅三味線』の近刊予告である。

まずはその巻六末の翻字を示しておく（**図版1**）も併せて参照。

#### 傾城伽羅三味線 全五冊

井二 白むくひむく海老尾の定紋

付 いうらおもての恋音緒のしめく、り

三ヶの津女郎改正新名寄入

一 嶋原の朝わかれ 伝受のしのび駒

二 吉原の夕まがき 秘伝のし、おどり

三 新町のたそかれ 口伝のばちあたり

四 鐘木の明ほの 相伝のつぎざほ

五 室津のよそほひ 秘密の手くだ揃

右之本七月<sup>二</sup>出来仕候御もとめ頼入候

宝永六年六月吉日

かうらいばし筋 油屋平右衛門

大坂

上久ほうし町三丁□ □（本）や（九左）衛門

刊行年月については、冒頭(2)にあるように宝永六年春頃と推定したが、同年六月であることが判明した。また、板元については冒頭(3)に示した理由から、従来の説に従い京の菊屋七郎兵衛と推定したが、これも訂正の必要がある。

相板の二肆のうち、一つは大坂「かうらい(高麗)橋 油屋平右衛門」であることが明らかである。これは、改題改編本『役者小夜衣』の板元でもあり、そうした出版を単独でおこなったことになる。油屋平右衛門は前述のように油屋与兵衛と同族と思われるが、油屋与兵衛は西沢一風の初期の浮世草子作品『御前義経記』や『寛濶曾我物語』(元禄十四年「一七〇一」刊)の板元の一人であり、本書の刊行に関してもそうした繋がりの影響が推測される。今一つの書肆名は破損のために十分読み取れないが、所付から「上久ほうし町三丁目 正本や九左衛門」、すなわち浄瑠璃本を中心とした書肆業を営んでいた西沢一風本人が板元の一入であったことが推測される。

この時期、浮世草子作者としての一風は、元禄十六年刊『風流今平家』以来菊屋七郎兵衛方からの刊行が続いており、特に本書同様の横本型浮世草子に関しては、『傾城武道桜』(宝永二年刊)、『伊達髪五人男』(宝永三年刊)、『風流三国志』(宝永五年刊)があり、『風流御前二代曾我』(宝永六年刊)や後述する『けいせい伽羅三味線』(宝永七年刊)、あるいはこの時期の刊行とされる『衆道恋暮桜』も含め、横本型浮世草子は菊屋七郎兵衛からの刊行と推定されている。

ただし、宝永六年以降の板行本の現存する本は刊年月・板元が未詳であり、しばらくの間を置いて執筆した『今源氏空船』(正徳六年「二七一六」刊)以降、主板元が菊屋長兵衛に移り変わることを考えると、この宝永六年あたりが、少なくとも浮世草子出版に関しては、菊屋七郎兵衛との提携において曲がり角のような時期だったと考えられる。

またそうした流れとは別に、『好色閻魔歌舞記』の内容と菊屋七郎兵衛との差し障りもあり得るだろう。本書の主要登場人物の一人、二代目嵐三右衛門が元禄十四年に亡くなった際、菊屋七郎兵衛は『嵐かたみの文箱』(東北大学蔵本の題簽には『風都土』)を追善の本として同年中に出版しているが、ここでは三右衛門臨終の様を詳しく描く中で妻のおいちも登場する。一方『好色閻魔歌舞記』における三右衛門ゆかりの尼さよは妾という設定であり、菊屋七郎兵衛としては板元となりづらく、一風・油屋の相板により大坂で刊行されたのではないかと考えられる。

#### 四 『傾城伽羅三味線』の近刊広告が想像させるもの

次に、前掲巻六末尾に付された『傾城伽羅三味線』近刊広告について考えてみたい。序記から西沢一風作であることが確実なこの本は、従来、この期の菊屋板横本型浮世草子の体裁によるものであり、また、次に見るような広告により、刊記を欠くものの菊屋七郎兵衛

板であるとされてきた。<sup>(1)</sup> その広告とは、『好色閻魔歌舞記』と同月に菊屋七郎兵衛から刊行された月尋堂作『儻偶用心記』の巻末近刊予告で、

追<sup>おつて</sup>而<sup>あつて</sup>出来<sup>い</sup>分<sup>ぶん</sup>

全部 五冊

傾城伽羅三味線

八月二日出申候

西沢作

附タリ

白むくひむく海老尾の定紋

裏表の恋音緒のしめく、り

全部 五冊物

とあり、「右の板行近々<sup>はんぎやうきんく</sup>に出来仕候面白物候間<sup>おもしろき</sup>／御求奉<sup>もとめ</sup>頼候<sup>たのま</sup>」  
としている。

さらに、翌年正月菊屋七郎兵衛より刊行の『けいせい禁談議』(『風流三国志』の改題本)掲載の広告では、『風流三国志』刊行時に「伽羅三味線 全部三冊／右此本京嶋原女郎名よせ評判也近日新板に出  
来仕候御しらせのためこ、にしろし申候」とあった広告文の「近日」  
を削り、既刊として扱っている。その他の状況から考えて、おそらくは『けいせい禁談議』同様宝永七年正月に、菊屋七郎兵衛より刊  
行されたのであろうと推測されている。今のところこの『好色閻魔  
歌舞記』に付された近刊予告が、菊屋刊を覆す直接的な材料にはな

り得ないが、ここからいくつかの推測を成すことは可能である。

一風が作中において自分の作品を宣伝することは本作以前にも見られたが(『茶屋調方記』等)、いかにも油屋平右衛門と正本屋との相板で刊行されるかのような体裁の広告は、珍しいであろう。しかも『好色閻魔歌舞記』では『傾城伽羅三味線』の予告内容が『儻偶用心記』の広告よりも詳しく書かれており、出版予定も一月早く予告されている。実際には刊行までに(すなわち作品の完成に)時間がかかったようであるし、出版された内容は『好色閻魔歌舞記』の広告通りではない。現存の『傾城伽羅三味線』は、巻一が京・嶋原、巻二・巻三の二および巻五の一が大坂・新町、巻三の三・巻四の二が江戸・吉原、巻四の三が播州・室津、巻五の二が伊勢・古市となっている。内容が整然としないだけではなく、序記が「宝永目出度年  
のめでたい月日」と曖昧な書き方になっていることや、巻末の広告がかつて『傾城武道桜』に使われた広告の使い回しであることなど(このことはこの本が菊屋刊であることを補強するが)、かなり慌てて商品としての体裁を調べたことがうかがえる。

ともあれ、『傾城伽羅三味線』が菊屋七郎兵衛より刊行されたことは間違いなさであろう。

ただし、『傾城伽羅三味線』、あるいは同時期の『風流御前二代曾我』など、現存本において菊屋七郎兵衛の名前が明記されていない、宝永六・七年頃の作品において、作者としての西沢一風のみならず、本屋としての正本屋九左衛門が出版に関与しようとし(あるいは実

際に関与し)、そのあたりから菊屋七郎平衛―西沢一風の関係に変化が見られるようになったのではないだろうか。宝永七年正月の菊屋による『けいせい禁断議』刊行も、そのことに影響を与えた可能性がある。

以上、『好色閨魔歌舞記』について、新出の情報を付加し、刊記および広告が指し示すものについて想像を交えた推論を提示した。本書刊行前後の事情については、今後も新出資料の出現を待ちつつ、改めて考察してみたい。

## 注

- (一) 長谷川強監修、平成二九年一〇月、笠間書院。当該項目は杉本執筆。
- (二) 説明は、長谷川強『日本書誌学大系四二』浮世草子考証年表―宝永以降―(昭和五九年二月、青裳堂書店)、林望「影印本の条件―『役者小夜衣』を例として―」(『早稲田大学蔵資料影印叢書国書篇第九卷』浮世草子集)月報、昭和六一年九月、早稲田大学出版部)、および、国文学研究資料館蔵『役者狭夜衣』のマイクロフィルムによる。
- (三) 架蔵本および国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベースによる。

(四) 長谷川強注(一)前掲書、同『浮世草子の研究』(平成三年十一月再版、桜楓社)、井上和人「『役者小夜衣』小考―役者と配役―」(『近世文芸研究と評論』五七、平成二一年一月)、同「表記から見た一風浮世草子存疑作―連声表記と用字を材料に―」(『近世文芸研究と評論』七三、平成一九年一月)。

(五) 卷一は個人蔵本。卷二・三・六は原本未見、「往来物倶楽部」小泉吉永氏提供の電子画像による。卷四・五は、国文学研究資料館蔵マイクروفイルム(『役者狭夜衣』)による。

(六) 石上阿希「リチャード・レインコレクション蔵 西沢一風作『風流足分船』について―初期上方艶本に関する考察―」(『近世文藝』八五、平成一九年一月)。

(七) 長谷川強『浮世草子の研究』、同「けいせい禁断議―野傾髪透油―」(『浮世草子新考』所収、平成三年十二月、汲古書院)、中島隆解説(『早稲田大学蔵資料影印叢書国書篇第九卷』浮世草子集)(昭和六一年九月、早稲田大学出版部)。

〔付記〕本稿を執筆するにあたり、『好色閨魔歌舞記』旧蔵者としてデジタル画像をご提供くださいました「往来物倶楽部」の小泉吉永氏に、衷心より御礼申し上げます。

本稿は、科学研究費補助金(研究課題番号・一八K〇〇二九〇)による成果の一部です。

【図版1】

傾城の庄三味線 全五冊  
 并白くいしと海老尾の定紋  
 付り うちかとの無音結のなまう  
 三の條 高改正 刺巻券又  
 一 傳束の約止道 傳束の巻入約  
 二 傳束の又巻丸 秘傳のらむうり  
 三 新時のたま道 秘傳のらむうり  
 四 傳束の明あ 相傳のつごう  
 五 傳束のまぢひ 秘傳のらむうり  
 右中七月 樂仕のりあれか  
 寶永六年六月 旨目  
 後 沖公栄在焉

## **A Second Study on *Koushoku Emma Kabuki***

SUGIMOTO Kazuhiro

In the previous issue of No. 38 of this magazine, I introduced the first volume of *Koushoku Emma Kabuki* (1709), it was written by Nishizawa Ippuu and a newly found material. The article presumed that it was published in the spring of 1709 and the publisher was Kiku-ya Shichirobee in Kyoto.

Recently, volumes 2, 3, and 6 of this work have newly found, and it has become necessary to modify this presumption.

In particular, the fact that the publishers were Abura-ya Heiemon and Nishizawa Ippuu in Osaka, not Kiku-ya, is a complex element thinking about the publishing situation of this work.

This article examines the relationship between publishers in Kyoto and Osaka on the publication of *Ukiyo Zoushi*, as well as the revision of the information in the previous article.